講　演

演題「宗祖の教えと世界平和―曼荼羅と南無妙法蓮華経と私たち―」

講　師
山口県立大学教授
鈴木　隆泰先生

皆様、こんにちは。山口県立大学・善應院の鈴木隆泰と申します。まず、このような機会を与えてくださいました関係各聖各位に心よりお礼を申し上げます。私のような若輩者が皆様の前でお話をさせていただくなどというのは、非常におこがましいことではありますけれども、インド仏教を学問的に見つめてきた者の一人として、日蓮宗の教えはこうなんじゃないかと私なりにつかんだものがございます。これはぜひ本宗の方々と共有させていただきたいと願って、本日この場に参りました。一時間半という時間を頂戴しております。一所懸命話しますので、一所懸命お聴きになってください。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

では、失礼ながら、坐らせていただきます。お手元の資料をごらんになってください。「宗祖の教えと世界平和―曼荼羅と南無妙法蓮華経と私たち―」と題しまして、全部で13ページの資料を用意させていただきました。

０．ポイント

まず、私がここでどういうことを申し上げたいのかという結論部分から先に述べさせていただきます。

―法華経は「仏教世界の統一」を試みた経典です。一方、宗祖大士日蓮聖人は大曼荼羅（全世界、全宇宙）ご本尊を開顕し、お題目のもとに全世界の統一を目指されました。曼荼羅の意味、及び〈諸行無常〉を真に理解し実践することで、聖人門下の我々は世界平和に貢献できるものと確信しております。―

本日述べたいことの内容は、ここに尽きております。

１．沈黙する釈尊、梵天による勧請→説法の決意

では、具体的になぜこのようなことが言えるのかということに向けて、今から順に進んで参ります。まず「1．沈黙する釈尊、梵天による勧請、そして説法の決意」です。有名な梵天勧請に至る前提になる、釈尊がお覚りになって、その後沈黙している場面です。それをパーリ語原典から和訳しました。少しだけ読んでみます。

「私が覚ったこの縁起の理法は、甚深であり、見がたく、理解しがたく、寂静で、卓絶しており、思弁できる領域を超え、微妙であり、賢者のみが体験できるものである。ところが衆生たちは、アーラヤ（ここでのアーラ

ヤは、これまでの経験や体験、言語習慣のことを指します）を楽しみ、アーラヤを喜び、アーラヤに執着している。」つまり、今まで獲得してきたものに執着しているんです。

「しかし、アーラヤを楽しみ、アーラヤを喜び、アーラヤに執着している衆生たちにとって、この境地、すなわち縁起の理法は見ることができない。

さらに彼らには、一切のサンスカーラの寂滅であり、一切の執着対象を捨て去ることであり、渇愛の滅尽であり、貪欲を離れることであり、寂静の境地である涅槃もまた見ることはできない。

たとえ私が教えを説いたとしても、他の人々は私の言うことを理解してはくれないだろう。そうだとしたら、私には伝わらないという悩みと、やっぱり伝わらなかったという徒労感のみが残ることとなるだろう。」説いてもわからないから、疲れてしまうから嫌だとおっしゃっておられます。

次です。「私が難行の末にやっとのことで証得した縁起の理法を、いまや説く必要は何もない。貪りと瞋りに打ち負かされている者たちには、この理法を覚ることなどできないからだ。それは流れに逆らって川をさかのぼるようなものであり、甚深、微妙、難見、微細である。貪欲に染まり、暗黒に覆われている者たちは、とうてい見ることができない。」

また、誰も体験したことがない覚りを無理やりことばで伝えようとすると、人々を悩害するおそれがあると述べていらっしゃいます。

2ページへ参ります。そこで梵天です。実際には釈尊の内的葛藤を梵天勧請という形であらわしています。梵天が嘆くわけです。「ああ、世間は滅んでしまう、ああ、世間は完全に滅んでしまう、正しく覚ったブッダが沈黙することに気持ちを傾けてしまい、説法しようとされないとは。」

それで三止三請が行われて、ちょっと飛ばして真ん中部分です。そこで梵天の三度にわたる勧請を受けた世尊は、衆生に対する慈悲心により、仏眼をもって世間を観察したところ、おお、わかってくれる者もいそうだ、となるわけです。

そこで、蓮華の比喩が出てくるんです。青い蓮華、紅い蓮華、そして、白い蓮華、中には咲かないものもある。でも、咲くものもちゃんとあるじゃないか。華を開かせるものもある。そういう者たちならわかってくれるかもしれない。ここでの蓮華の比喩というのは、間違いなく後の妙法蓮華経の蓮華のヒントになっていきます。

一番最後の部分です。「私の説法を聞ける耳を持った者たち、彼らにだけ甘露の門は開かれた。これまでのアーラヤへの執着や世俗の信仰を捨てよ。」この「信仰を捨てよ」の部分は、原文の「パムンチャントゥ　サッダン pamuñcantu saddham」の解釈次第では、「信仰を持て」「信仰の心を起こせ」とも読めます。でも、私の場合には、これまでの信仰を手放せ、アーラヤへの執着を捨てろという意味で、「捨てよ」と解釈しています。そして最後です。

「さもないと、人々を悩害するおそれがあると考え、私はすばらしいすぐれた法を説くことをためらっていたのだ。」

3ページ

へ参ります。ユダヤ教、キリスト教、イスラームという宗教は、創造主という「主the Lord」がある宗教です。また、ユダヤ教、キリスト教には創造主が遣わす救世主という「主」もあります。そして、そのような主が教えを説くんです。その教えはその宗教において唯一絶対の真理なんです。その真理が聖典としてまとめられてきます。ユダヤ教、キリスト教、イスラームの人たちにとって、聖典というものは、主からもたらされた真理のことばです。それを主ならざる者が勝手に変更したり、冒涜するということは絶対に許されない。唯一絶対の真理です。ですから、ユダヤ教は旧約聖書、キリスト教は新約聖書、イスラームはクルアーン、ほとんど単一の、とてもコンパクトで、これのみが真理である、真理がことばとしてあらわれてくる、この真理に従え、というタイプの宗教なのです。

一方、仏教で教えを説いたのは「佛陀（ブッダ）」です。この字「佛」には意味があるそうです。今、略字は「仏」となってしまっていますけれども、この「弗」には、左にある「偏」を否定する働きがあるそうです。水が沸いて水蒸気になって、別のものになります。人が覚って佛に成っていく、別ものになっていくというので、場合によってはあえて旧字体を使うのが最近の私の傾向です。

ブッダが教えを説くわけですけれども、仏教における真理というのは、涅槃や無上菩提（阿耨多羅三藐三菩提）です。そして、それはことばになりません。体験するしかないわけです。誰も体験したことのない覚り、当時釈尊のみが佛さまであって、釈尊以外に、その世間に覚りを体験した人が一人もいないんです。ですから、釈尊は自分の体験をことばにできないんです。

ことばはそれが何を指し示しているか、ことばと意味内容の関係がありますね。この、ことばと意味の関係を共有している人たちの間でしか、ことばは使えません。ですから、例えば、英語の苦手な方がハリウッド映画を吹き替えなしで観るとき、日本語字幕がないと何を言っているかわからないとなるわけです。

仏教における真理というものは、各自が体験するしかない。自分が覚った縁起の理法、この縁起の理法というのは、無明に始まって、サンスカーラ（行）が続いて、というあの十二支を字面で追うことではなくて、縁起の逆観を完成させて、成仏することをいっています。それが「縁起を観る」ということの内容です。それを体験したことのない人間に、どんなに口で説いても伝わらないのです。

私のゼミでは、シュールストレミングという、世界で一番臭いとされている食べ物を食べる恒例の行事がありまして、今度また食べるんですけれども、あの味、においを、食べたことのない方に伝えることはできないです。ひたすら臭い。世界最臭兵器、最も臭いんです。（笑）

例えば、行堂に入られた方は、行堂でどのような体験をしたというのを、ことばでは伝え切れないはずなんです。個人の体験というものは、それを共有していて、あのときつらかったよね、一緒に水をかぶったよねというのは、それを体験しているとわかるけれども、そうでない人にはわからない。私は行っておりませんので、行堂はつらかったと言われても、つらそうですね、寒そうですねというぐらいしかわからないです。

ブッダである釈尊が覚った真理というのは、ブッダ以外の人にはことばにならない。伝えてしまうと、かえって間違って伝わってしまうかもしれない。また、下手に説くと、人々を悩害するかもしれない。そこで黙っていらしたんです。

でも、釈尊は説法を決意されます。そして、鹿野苑において最初の説法、初転法輪をなさるわけです。そこで説くのはこういうことです。かつて一緒に修行をしていた五比丘に対して、「私は中道を実践して成仏したのだ。」そして、「その中道とは、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八正道である。これを実践して、私は覚りを得たのだ。」これだけなんです。ああ、なるほどそうか、では、私もこれから八正道、中道を実践して、自分も成仏するぞとなるかというと、そうならないんです。

なぜか。八正道の「正」とは、これはイコール中道の「中」になるわけですが、何が正しい実践なのか、何が中なる道なのか、具体例に一言も触れられていないんです。その上で、自分はこれを実践して、ブッダに成ったのだ、と。最初はこれだけなんです。

でも、実はその答えは示されていました。覚りに至る道が正しい道で、中なる道なんです。そして、それは人によって違っていていいんです。唯一絶対のこの方法でなければいけないというのは、どちらかというと、こっちの一神教的な発想です。一神教ならいいんです。全世界を造った創造主や、救世主がいて、そこから真理がことばとなってあらわれてくる。この唯一絶対の真理に従えというタイプの宗教ならば、です。

一方、仏教というのは、正しい、中、それを限定しないんです。逆に限定しないということを「中」と表現しているんです。真ん中という意味ではありません。それは中庸です。1と3があったとき、2をとるのは中庸です。中道は、もうこれしかだめという執著や限定から解放されることなんです。

釈尊はお覚りになってから入滅に至るまで、ただの一言も真理を説かれたことはありません。真理はことばにならないからです。それは体験してもらうしかない。そのかわり釈尊は、我々が真理を体験できるよう、あれやこれやの手段を講じて教えを説いてくださいました。

この、あれやこれやの手段が方便というものです。方便と真実があるのではありません。我々の目の前には方便しかないんです。その真実の救済手段である方便を通して、我々は歩んでいって、みずから真理を体得し、成仏するのです。

仏教はブッダが説いた教えであると同時に、ブッダに成るための教えといわれます。一方の一神教では、人々は絶対に創造主という存在になることはできません。創造主は造り手、人間は造られた側です。その間には絶対に越えられない断絶があります。しかし、仏教はそういうタイプの宗教ではないのです。この状態（ブッダ）を最終的なゴールとして歩んでいくのです。

仏教では、真理と真実をはっきりと分けます。英語では分けないです。英語ではどちらもトゥルース truth といってしまいます。キリスト教的発想では、両者が一致してしまっているから、一つしかないんです。でも仏教では、これを分けているんです。これを一緒にしてしまうと、一神教的な理解になってしまいます。それは仏教の枠を超え出てしまいます。我々の目の前には、真実の教え、真実の救済手段は幾らでも開示されています。しかし、真理は開示されていない。それは諸法の実相です。諸法の実相は、唯佛与佛、佛さまにしかわからないのです。方便品に諸法の実相は示されていません。「諸法の実相は、おまえたちにはわからない」と説かれているんです。

また戻ります。3ページの頭の部分です。つまり、ことばにならない、形としても見せ

ることができない形而上のもの（形而下とは形を持ったものです。目の前に「はい」と見せられるのが形而下のものです）は、「これが涅槃、覚り、諸法の実相だ。」と見せることができない。それはどうしてもできないので、最初、釈尊は沈黙されていました。でも、そのままでは人々は苦しみ続ける。どうしよう。だったら、真理そのものは伝えられないけれども、真理に至る手段を法（教え）として説こうということで、初転法輪が行われるわけです。

人々を真理に至らせる手段を方便、ウパーヤと申します。釈尊の説法は真理です─涅槃、覚り、諸法の実相が仏教における真理です─そのものではありません。全ての教えは方便です。人々を真理へと至らせるための真実の救済手段なのです。仏教では、真理と真実を峻別するのだということです。これをまず押さえておいてください。

わりと混同されやすく、場合によっては、仏教をキリスト教、イスラーム的に理解してしまうということもままあるようです。真理と真実が一緒になるものは一神教タイプ、主が出てきて、この真理のことばに従え、これだけでいいんだというタイプの宗教です。一方、仏教はそういう宗教ではないのです。

2. 小乗仏教と大乗仏教

小乗の原語はヒーナヤーナといいます。大乗はマハーヤーナと申します。マハーには確かに大きいという意味があります。だから、みんなが乗れる大きな乗り物なんだと思われがちです。ところが、ヒーナヤーナのヒーナには、小さいという意味はありません。ヒーナは劣ったという意味です。

つまり、ここでいう大とか小とかは、物理的な大きな乗り物、一人しか乗れない小さな乗り物ではなくて、価値的な大小なんです。小乗とは小さな乗り物という意味ではありません。劣った乗り物という意味です。大乗とは大きな乗り物という意味ではありません。立派な乗り物、すぐれた乗り物なのです。では、どういう点で劣っているのか、どういう点で立派ですぐれているのか、それはゴールがどこかなのです。

（ホワイトボードに向かって）これは消します。よく描く絵なので、ごらんになったことがあるかもしれません。こちらは苦しみの岸、此岸です。ここにはものすごい大海がある。砂漠でもいいんです。化城喩品では、曠野に喩えられています。同じです。私は海で喩えることが多いです。此岸、彼岸ということばが使いやすいので、海です。でも、構造は化城喩品と全く同じです。

こちらが覚りの岸、彼岸です。此岸から彼岸に渡るのが仏教徒としての務めになるわけです。彼岸には、覚り、涅槃という果実、フルーツがなっているわけです。これを見たことも食べたこともない人に、これはこんな味だと伝えることはどうやってもできません。釈尊はこの彼岸に至って、この実を食べて成仏なさった。でも、その味を伝える方法がないので、最初沈黙されていた。でも、此岸を見てみると、苦しんでいる人がいるということで、説法を決意され、釈尊の側である彼岸から、こちらの此岸にやってきてくださったんです。それが「如来」です。如の世界より来至してくれたわけです。ほんとうはここでずっと一人で覚りという果実を食べて、自受法楽の境地を味わい続けてもよかったんです。でも、釈尊は自分だけが楽しんでいるのをよしとせず、如の世界、ことばを超えた真理の世界、彼岸からこちら（此岸）にもう一度来至してくださったわけです。だから、如来なのです。そして、初転法輪を行う。そこでは、

中道、すなわち八正道をお説きになった。でも、具体的な教説はそこで述べない。八正道の教示の後で、具体的におまえにはこれ、おまえにはこれと説かれたんです。

仏教では、誰に向かって説かれた教えなのかというのがとても大事です。これは日蓮聖人も全く同じです。日蓮聖人はたくさんのお手紙を書いていらっしゃいます。出す相手によって、書く内容を変えられます。例えば、自分がどうして出家したのかということも、相手に応じていろいろ変わります。方便を出されていたわけです。まさに佛さまとしての仕事をなさっていたわけです。

大事なのは、ここの乗り物の絵です。小さい乗り物なのか、大きな乗り物なのかではなくて、彼岸にきちんと渡れるかどうかなんです。自分は泳いでいきたいという人には、釈尊は泳ぎ方を教えます。自分は人見知りだから、小さな舟で行きたいという人には、釈尊は小舟のつくり方を教えます。いや、私は寂しがりやだから、大きな船でたくさんの人と行きたいという人には、大きな船に乗るチケットのとり方を教えます。また、これは、ほんとうは緑ではなく黄色のペンが欲しいんですけれども、自分は潜水艦に乗っていきたい、隠れていきたいのだ、黄色だと思ってください。潜水艦は基本的に黄色でなければだめなんです。（笑）

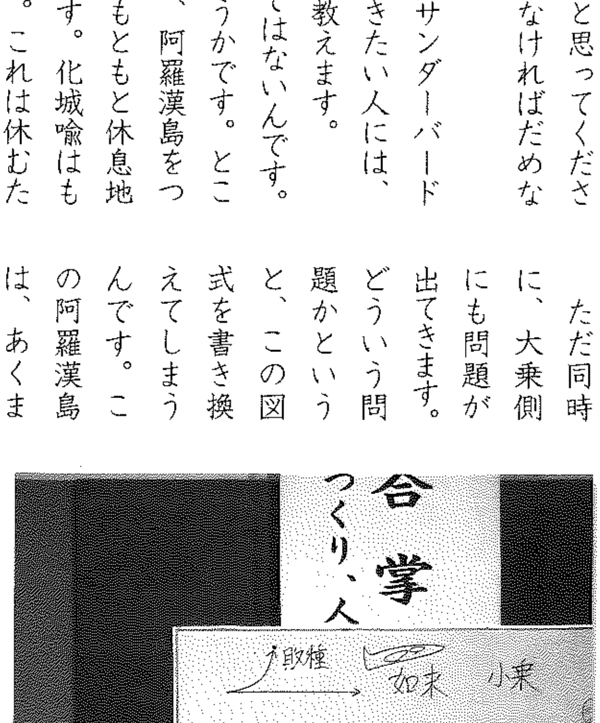
これは何か飛ぶものです。サンダーバード2号っぽいでしょ。飛んでいきたい人には、飛行機のチケットのとり方を教えます。

問題はどの乗り物に乗るかではないんです。向こう岸、彼岸に着けるかどうかです。ところが、仏滅後の仏弟子たちは、阿羅漢島をつくってしまいました。これはもともと休息地なんです。まさに化城なんです。化城喩はものすごくすばらしい比喩です。これは休むための仮の島なんです。だけれども、ここを最終ゴールとしてしまった。それが小乗です。

小乗というのは、大乗側からの差別的な言い方なので、使わないほうがいいという意見もあるようですが、私は使います。成仏を目指さない、途中までしか行かない人は劣った乗り物に乗っているからです。

ところが、小乗と大乗のどちらにも問題が起きてきます。まず、小乗は問題です。成仏を目指さずに、それで仏教でいいのか、阿羅漢島止まりでいいのか、それはたしかにそのとおりです。小乗は非難されてしかるべきだと私は思います。

ただ同時に、大乗側にも問題が出てきます。どういう問題かというと、この図式を書き換えてしまうんです。この阿羅漢島は、あくまで彼岸に至る途中の休息場所であって、ここにたどり着いて休んだ後、また歩んでいく途中の段階なんです。でも、小乗仏教の人たちは、もう着いたからいいよと、ここに安住して出てこようとしない。そこで手をかえ品をかえ、いや、向こうに行こうよと、これが般若経のあたりです。頑張りましょう、行きましょう、六波羅蜜をやりましょうと言うわけです。



そして、阿羅漢の代表である須菩提、スブーティ、般若経の中では般若波羅蜜をよく理解した者という設定で、みんな、彼岸へ行きましょうとやるんですけれども、実際にはなか

なか動かない。そこで、大乗仏教側がついにぶち切れてくるんです。それが維摩経という経典です。

阿羅漢というのは、あくまで途中経過であって、そこを経た上でさらに成仏へと進めるわけです。これが仏教の正しい図式です。ところが、維摩経はこの図式をこう書き換えます。この菩薩の道でしか成仏できない。阿羅漢という方法で三界を離脱した者は、もう二度とここには戻ってこられない、ルートを一旦それて、阿羅漢というゴールに着いた者は、二度と成仏というゴールには行けない。成仏する可能性・種を腐らせてしまった人たちを敗種といいます。このような人たちを想定するに至りました。

維摩経によれば、阿羅漢はもう絶対に成仏できないんです。ただ、絶対に成仏できない者がいるんだということを認めて、それで仏教と呼べるのか。たしかに小乗側には問題があります。自分は阿羅漢でいいんだと思って、止まってしまう。それは大問題です。ただ、大乗側もあいつらはもうだめだから、成仏できないからといって切り捨ててしまって、それでよいのでしょうか。

どちらも釈尊が恐れたアーラヤに執著しているんです。小乗側も阿羅漢という境地に来たからいいじゃないか、自分の獲得したものにこだわって、執著します。一方、大乗側は、俺たちはもう成仏の道が決まっている、あいつらは知らないよと。釈尊が恐れていたように、やっぱり人はアーラヤに執著する。もっと大事なものがあるのに、手に入れたものを手放せないんです。

3.『法華経』―仏教世界の統一を試みた経典

そして、その混乱期にあらわれてくるのが法華経だと私は考えています。時代的には、これで合っています。私の見解としては、法華経の出現の理由は、仏教世界の統一だと考えているわけです。それについて説明申し上げます。

3―1.「方便品第二」

まず、「方便品第二」、方便品の原題はウパーヤ・カウシャリヤ・パリヴァルタと申します。巧みな救済手段、善巧方便についての章という意味です。

3―2.〈梵天勧請説話〉と「方便品」との共通項

学問の世界で、方便品は梵天勧請説話をもとにしてできたというのは、ほぼ証明されています。梵天勧請説話と方便品との共通項は、まず、どちらも釈尊が禅定に入った状態から出てきて、問われないまま自発的に語り始めます。それは、梵天勧請説話にしても方便品も、全く同じです。そしてどちらも仏智、佛さまの智慧は難解であるということを強調するんです。おまえらにわからないと。そして、いや、そんなこと言わないで、説いてくださいという勧請が行われる。梵天勧請説話では梵天による勧請、方便品では舎利弗による勧請が行われます。そして、説かない、いや、そんなことおっしゃらずに、いや、説かないと三止三請が展開されるわけです。

また、どちらも教えが万人には通じないとも言っているんです。先ほどの梵天勧請説話では、蓮華の中には、悪い蓮華もある、蓮華が全部いいわけではない。また、方便品でも、五千起去で帰らせてしまっています。あとは偈文のほうで、これを秘要とせよ、相手構わず教えてはいけないと釈尊はおっしゃっています。

ただ同時に、釈尊には衆生に対する大いなる慈悲心があります。梵天勧請説話では、慈悲心に基づいて衆生観察を行って、「よし、説こう。」と。一方、方便品では、「一大事の因縁を以て、人々を仏知見に入れさせるために出現するんだ。」と。また、どちらにも仏教とは何かが示されています。真理（覚り、諸法の実相）と真実（教説）を峻別するというあたりです。そして、梵天勧請では、三止三請に続いて、初転法輪が行われたわけです。

一方、法華経では今度は舎利弗による三止三請の後に、方便品の説が始まります。方便品の本当の説というのは、三止三請の後からなんです。私たちは通常、最初の部分を読んでいますけれども、あれは仏智はわからないと言っている部分です。方便品の本当に大事な部分は、三止三請の後の部分です。そしてそれを説いた後に、今度は譬喩品で、今、第二の無上の法輪が回されたと天人たちが喜ぶ。初転法輪と二回目の無上の転法輪が行われた。このように、方便品は明確に梵天勧請説話を意識しているのです。

法華経をつくった人たちは、仏教の歴史に極めて自覚的で、ものすごく勉強しています。しかも難しくないことばで説いているんです。難しいことを難しく説くのはとても簡単です。簡単なことを難しく説くのは愚か者です。難しいことを簡単に説くのはなかなか大変で、説く人にかなりの訓練がないとだめなわけです。法華経をつくったのは、間違いなく佛さまです。釈尊ご自身ではないかもしれませんけれども、佛さま以外にはつくれません。

3―3．「方便品」が説く、無上菩提に向けた修行

「3の3．方便品が説く、無上菩提に向けた修行」です。「未来世にも、幾千万もの思議することもできないほど多くの無量の諸仏があろうが、彼ら最上の世間の保護者である諸仏もまた、このような種々の方便を示すであろう。彼ら未来世の世間の導師たちには無量の善巧方便があって、それを用いてこの世間において、幾千万もの生命あるものたちを、無漏の仏智へと導くであろう。彼ら諸仏の教えを聴いて、ブッダと成らないような衆生は、いかなる時もただの一人としていない。なぜならば、〝私は自らが覚りへ向けて修行した後に、他の者をも覚りへ向けて修行させよう〟ということが、諸々の如来の共通の誓願だからである。」

なぜ人々が覚れるのか、法華経はそれに明確に答えています。それが諸仏の誓願だからです。そして、その誓願が成就したので、我々は覚れるのです。

「法華経は人々が成仏できると言っているけれども、理由が書いていない、だから、その後、仏性思想などが出てきたんだ」とよく言われますけれども、そうではないのです。みんなを覚らせようと思って佛さまたちは修行されたんです。そして、その誓願は成就したと仰っている。ということは、諸々の如来に共通する誓願の成就によって、我々は成仏できることになるわけです。

実はこの誓願の成就による成仏可能性というのは、同じく無量寿経にも表されています。無量寿経が先かもしれません。なぜ衆生は念仏で極楽往生できるのか、それは阿弥陀仏の過去世の姿である法蔵菩薩が立てた、「阿弥陀仏を念ずる者は死後、極楽世界に往生する。ただし、五逆罪を犯した者を除く。」という誓願が成就したからなんです。

戻ります。つまり、法華経が説いているように、全ての仏道修行のゴールは無上菩提です。仏教とは、佛の説いた教えであると同時に、佛に成るための教えです。ところが、成

仏を目指さない小乗仏教徒、そして、小乗仏教徒から成仏の可能性を奪い去ったそれ以前の大乗仏教徒、双方ともみずからが獲得したもの、みずからの経験や体験、境地に固執し、仏教は誰もが佛に成るための教えなんだという大前提を忘れてしまっていたわけです。方便品は彼らに対し、仏教とはそもそも何かを思い出させようとしているのです。

3―4．永遠の釈尊

如来寿量品を中心とする永遠の釈尊、久遠実成本師釈迦牟尼仏は、方便品の一乗思想と並び、法華経の中核的思想と考えられて参りました。とても大事である、と。だから我々もご法要、お勤めのときは必ず寿量品をお読みするわけです。

でも実は、釈尊の永遠性を説いたのは法華経が初めてではないのです。法華経は従来からある「釈尊の永遠性」という観念をもう一度説き直しているんです。では、どこから釈尊の永遠性を説いているのか、実は小乗仏典の段階からです。

最近の研究で明らかになりました。以前の研究はひどいんです。ほとんど同一の人格によって、二つの誤った説が流布されました。

一つは、お釈迦さまはお坊さんがお葬式に携わるのを禁じられたというもの、もう一つは、釈尊はもともと人間だったけれども、後代の人間が神格化したのだというもので、この二つの説は同一のとても高名な先生がおっしゃいました。今では、どちらも間違っていたことが明らかになっています。

仏教徒にとって釈尊というのは、最初から超越的な存在なんです。我々と同じなどということは、とても考えられない。海外からも随分批判されています。「今までの仏教学は、神話学に無知な学者によって、ひどい目に遭ってきた。これからは釈尊を永遠だと考えている人たちの知恵をかりて、もう一度仏教本来の姿を取り戻さなければならない。」と。そして、釈尊を永遠だと信じる代表格は我々日蓮宗のはずです。我々は仏教を本来の姿に戻していくというとても重要な役割を担っているわけです。

本来の仏教の姿では、釈尊はずっと永遠なんです。例えば、サンユッタ・ニカーヤという原始経典にこう書いてあります。釈尊が説いています。「ヴァッカリよ、法を見る者は私を見る、私を見る者は法を見るのである。」次はディーガ・ニカーヤからです。「ヴァーセッタよ、如来は次のように呼ばれるのである。いわく、法を身体とする。」これ、法身です。法身（ダルマカーヤ）の発想は初期仏典からあるんです。法そのもの（ダルマブータ）、真理と一体化してしまっているんです。もはや何者でもない、真理と一体化して、向こう側、彼岸に行ってしまって見えない存在なんです。それがあえて姿をとって此岸に現れ出てくださっているんです。

つまりは、「真理の人格化」なんです。神格化されたのではないんです。釈尊は真理が人格化された存在なんです。後代の神格化ではないんです。もし「後代の神格化だ」というのであれば、それは、後代になればなるほど本来の姿に戻ったということなんです。もともと超越的な存在が人格化しているんです。

5ページに参ります。これはディーガ・ニカーヤの中でも涅槃経の部分です。「アーナンダよ、お前たちは、〝教えを説かれた師は亡くなられてしまった。私たちの師はもういらっしゃらないのだ〟と思うかも知れない。しかし、アーナンダよ、そのように考えてはならない。私がお前たちのために説いた法と制定した律、それが私の滅後にはお前たちの師なのである。」

次は、有名なミリンダパンハです。ミリンダ王とナーガセーナ比丘の対論です。今の西洋社会・文化の根本を形成してきたギリシャ世界の考え方と、仏教世界の考え方が対論を行って、なるほどそうなのかとギリシャ世界の側が納得していくというお話で、ミリンダパンハは現代でも西洋の方と対話するときに、とても大切なヒントをくれるものです。

『ミリンダ王の問い』というタイトルで、平凡社から三分冊で和訳が出されていますので、よろしかったら、ぜひお読みになってくださ い。パーリ語でなくても、日本語で読めるようになっています。諸宗教対話のときに、仏教はこう考えるんだ、逆にギリシャ世界はこう考えるのかという、一つのモデルケースを提供してくれています。

ミリンダ王が問います。ミリンダ王は実在の人物です。ギリシャ語でメナンドロスといいます。「尊者ナーガセーナよ、ブッダは実在するのですか。」これはもちろん釈尊入滅後の話です。「はい、大王よ、釈迦牟尼世尊は実在します。」「尊者ナーガセーナよ、そうであるならば、ここにあるとか、そこにあるとかといって、ブッダを示すことはできるのですか。」「大王よ、既に入滅された世尊のことをここにあるとか、そこにあると示すことはできません、大王よ。しかしながら、世尊を法身として示すことはできます、大王よ、なぜならば、法（教え）は世尊によって示されたものだからです。」

以上、法身として二種類のブッダ観が出ていました。法というのが、実はある意味ではくせ者です。法は、サンスクリットではダルマといいます。パーリ語でダンマです。今回は、サンスクリットのダルマでいきます。ダルマにはたくさんの意味があります。ここでは大きくいって二つの意味に絞って説明いたします。

一つは、所証の法です。自内証の法門です。つまり、先ほどの分類でいえば、真理のことです。ことばにならない方です。所証の法は、涅槃や無上菩提のことです。アディガマ・ダルマと申します。一方、説かれた法、所説の法もダルマというんです。デーシャナー・ダルマと申します。これは真実の方、ことばになっている方です。

つまり、どちらもダルマ（法）という語で表現してしまうので、我々はこの両者を混同してしまいがちです。ですが、仏教ではダルマといいながら、真理をアディガマ・ダルマ、真実をデーシャナー・ダルマと分けるのです。

この二つのダルマとブッダの関係、そして私たちの関係は絶妙に興味深いです。この所証の法を覚って、ガウタマ＝シッダールタはブッダに成りました。この真理、所証の法（アディガマ・ダルマ）は説けないんです。ことばを超えています。覚ったブッダ釈尊は、今度は真実、所説の法（デーシャナー・ダルマ）としてことばを出してきます。つまり、所証の法と所説の法という二種類の法の結びつくところ、結節点にブッダという存在があるんです。そして、我々からすると、この所説の法に従ってみずから歩んでいって、所証の法を覚ってブッダに成るんです。

二つのダルマがあるとすると、釈尊がここに存在している。これ（アディガマ・ダルマ）を覚り、ブッダが誕生し、教え（デーシャナー・ダルマ）を説く。そして、我々は教え（デーシャナー・ダルマ）に従って修行し、修行を完成させてこれ（アディガマ・ダルマ）を覚り、ブッダに成っていくという、こういう流れ、動きなんです。

この二つの法を結びつけるところにブッダという存在はあるので、仏教においてブッダとダルマというものはもともと結びついてい

るんです。両方のダルマの結節点にブッダが存在しています。釈尊は法身です。所証の法（ことばを超えた真理、無上菩提）、そして所説の法（教えという真実の救済手段）として永遠に存在しているのです。

また、次の部分は、全部読むと大変ですが、これはストゥーパですね。釈尊の遺骨をおさめたストゥーパを供養すれば、生天、死後天界へと生まれ変わる、天衆としての来世があるというのが説かれている部分です。これもディーガ・ニカーヤ中の涅槃経の一節です。

次が増一阿含経で、これは読んでみます。「如来の身体は金剛のようである。私の滅後にはこの身体を砕いて芥子粒ほどの遺骨にして世間に広く行き渡らせよう。そうすれば、如来滅後の篤信者は如来の姿・形を見ることはできなくても、私の遺骨を供養することができるだろう。これを供養すれば、四姓家や四天王や三十三天や自在天や他化自在天に生まれるという福徳も得られるだろうし、また、阿羅漢や独覚にもなれるだろう。もしブッダと成ることができたとしても、それもやはりこの遺骨供養のおかげなのである。」この増一阿含経においては、もはやストゥーパ崇拝で成仏までできるとなっているんです。

どうしてそういうことができるかといいますと、遺骨をあらわすダートゥということばと、エレメントやエッセンスをあらわすことば、どちらもダートゥなんです。インド語では遺骨とエレメント、エッセンス、要素、本質を同じダートゥということばで表現するんです。

釈尊の遺骨は、釈尊のダートゥですから、釈尊の構成要素、釈尊の本質そのものなんです。そのダートゥを納めたものが仏塔、ストゥーパです。それが卒塔婆、塔婆になります。それは釈尊のお墓ではなくて、生ける釈尊そのものなのです。つまり、釈尊の遺骨、ダートゥを納めた仏塔は、姿形を持った色身の釈尊なので、ストゥーパに対して供物を捧げたり、音楽を奏でたりして、供養するわけです。あれはブッダのお墓ではなく、生きている釈尊そのものと見られているんです。

釈尊を供養するとものすごく功徳があるということで、釈尊滅後には、ストゥーパ崇拝がとても流行るわけです。これは出家、在家を問わず、ストゥーパ供養、ストゥーパ崇拝、仏塔供養が、仏教における一つの崇拝の基本パターンになるんです。これが仏滅後の姿です。

これも今日では否定されていますが、一時期、大乗仏教は仏塔を崇拝する在家者から起きたんだといわれていました。これは違います。仏塔崇拝は、出家、在家を問わず、当時の仏教界における最も主流の信仰形態だったんです。仏塔は釈尊そのものです。釈尊は入滅してもその遺骨が残っていて、ダートゥをおさめたストゥーパは、釈尊の全身を復活させるものなんです。

では、それで全て解決かというと、問題点が二つあります。一つは、姿形を持ったものは必ず滅びるということです。実際、肉体を持った色身の釈尊が紀元前五世紀、四世紀、諸説ありますが、入滅されたように、姿形を持つ仏塔も同様に壊れやすい。これが第一の問題です。ぼろぼろに壊れていくんです。崩壊していくわけです。

二番目の問題です。仏塔は釈尊とは異なる点があります。それは説法を通した衆生教化(きょうけ)、衆生利益を施してくれない点です。無言なのです。

釈尊は二つのあり方、すなわち、①真理として（これは我々には見えません）、また、②教えとして（これは我々の目の前に提示されています）、この世にダルマカーヤ、法身とし

てとどまり続けてくれているのです。

しかし、釈尊滅後の仏教徒たちはこのことを理解せず、「ああ、もう無仏の時代だ。だったら、別の世界に行けばブッダがいるのではないか。ああ、そういえば、西方の極楽世界に阿弥陀という佛がいらっしゃるらしいぞ。」という具合に他世界の諸仏を求めたり、壊れゆく色身であり、しかも何も教えを説いてくれない、無言のブッダである仏塔に対する供養に傾注していくんです。

よろしいですか。お釈迦さまは法身（真理と教えという二つのありかた）としてこの世にちゃんと残ってくださっているんです。なのに、別世界のブッダを求めたり、壊れゆく、説法もしてくれないストゥーパ崇拝をしている。まさに「常説法教化・常住之説法・為説無上法・乃出為説法・在此而説法・為説種種法」、如来寿量品に説かれる永遠の釈尊は、説法と一体化した存在です。如来寿量品は、彼ら仏滅後の混乱期にある仏教、本来の仏教を忘れた者たちに、釈尊は法身として、すなわち真理や教えとして、永遠にこの世に現存していることを思い出させようとしているわけです。

3―5．『法華経』はやっぱり凄い（拙稿。宗教文化誌『法華』1062所収、2014）

次の「3の5．『法華経』はやっぱり凄い」というのは、宗教文化誌『法華』に書かせていただいた拙稿です。読んでみます。

―私たちが生きていくためには、水と空気は欠かすことができない。それは誰もが知っている。私たちの生命維持に不可欠にして、最も大切なもの、その代表が水と空気である。

ところがそれほどまでに重要な水と空気であるにもかかわらず、私たちが日常生活の中で、水や空気があることに感謝することはほとんどない。実際、蛇口を捻ればいつでも水は出るし、息を吸えばいつでも空気を吸入することができる。いわば、水や空気は私たちにとって、「あって当たり前のもの」に過ぎないのである。

しかし、本当に大切なものがすでに手元にあるというのに、それに感謝できないということ、言い換えれば、すでに手元にある「幸福、幸せ」に気づくことができないということは、実はとても悲しく残念なことなのではないだろうか。―

7ページに参ります。―ところで、当たり前すぎて注意を払わないどころか、あまつさえそのこと自体を忘れてしまった人たちがいた。他ならぬ、仏教徒たちである。釈尊は無上菩提を得てブッダと成った後、躊躇する心を乗り越えて、衆生を自分と同じ境地に至らせようと説法を開始した。仏教が「ブッダが説いた教え」であると同時に「ブッダに成るための教え」とよばれる所以がここにある。

ところが仏教徒のうちの多数派は、成仏は特別な者にしか達成することはできず、通常の仏弟子が至れるのは「阿羅漢」という聖者の位どまりと考えるようになった。〝誰もが成仏できる〟という「仏教にとっての大前提、当たり前のこと」が忘れ去られただけでなく、成仏は到達不可能なものへと位置づけが変えられてしまったのである。

仏教徒たちが忘れたのはそれだけではない。それは、「釈尊が永遠の命を持っている」ということである。もちろんこれは、釈尊が「不老不死の仙人」であることを意味するものではない。これまでの様々な研究で明らかにされているように、実は釈尊は初期仏典（原始仏典）の段階からすでに「普通の人間」とは見なされておらず、「真理・教え（法）を身体とする者」「法と一体となった者」と考えられ

ていた。

後代の術語を用いれば、釈尊は仏教の最初期から一貫して「法身」であったのである。肉体を持った「色身としての釈尊」はこの世から滅したとしても、仏弟子たちは真理（縁起の理法）そのものや、教えそのものである「法身としての釈尊」に、いつでも向かい合い、尊敬・崇拝することが可能であったのである。

ところが釈尊入滅後の仏弟子たちは、せっかく法身として釈尊が永遠にこの世に現存し続けてくれているというのに、仏舎利を納めた仏塔（ストゥーパ、卒塔婆）を色身の釈尊として崇拝するようになってしまった。ところが仏塔は色身の釈尊である以上、時間の経過とともに朽ちていくという宿命にある。そのうえ物質である仏塔は、「もの言わぬ、説法してくれぬ釈尊」でもあった。

そこで一部の仏教徒たちは、現在も説法し続けるという他世界の諸仏（阿弥陀仏が代表例）を求めるようになった。この世に法身として釈尊が現存しているにもかかわらず、それを忘れ、他の世界のブッダを崇拝するようになったのである。

そこで『法華経』は、仏教徒たちが忘れてしまった「仏教の常識、当たり前のこと」を思い出させるため、まず「方便品」で一切衆生は成仏可能であり、阿羅漢どまりなのではないと教えた。また「見宝塔品」では、『法華経』を説いた釈尊を仏塔たる多宝如来に讃歎させ、二仏並坐させることで仏塔崇拝を包摂するとともに、他世界の一切諸仏を釈尊の分身とすることで、拡散した諸仏の観念を釈尊に再統一しようとした。そして「如来寿量品」において、「常にこの世にあって法を説き続ける、法身たる釈尊」が開顕されたのである。

このように、多くの仏教徒たちが忘れていた〝本来の仏教〟を再提示した『法華経』は、もはや一経典という枠に収まりきるものではない。いわば『法華経』は、〝仏教そのもの〟ともいえるであろう。

私たちにとってとても大切なのに、そのありがたさを普段忘れている存在が、水や空気以外にもある。それは「家族」である。おそらくこの世の中に、家族で揃って食卓を囲むこと以上の幸せはないと筆者は思っている。「如来寿量品」の「良医の喩え」が、〝最愛の父親の死〟が示現され、その悲しみを通して子供たちが薬を服用し病が治るという筋立てとなっているのは決して偶然ではない。〝仏教そのもの〟であると同時に、私たちに本当の幸せとは何かを教えてくれる『法華経』は、やっぱり凄い経典なのだと改めて感じる。―

このような文章をしたためさせていただきました。

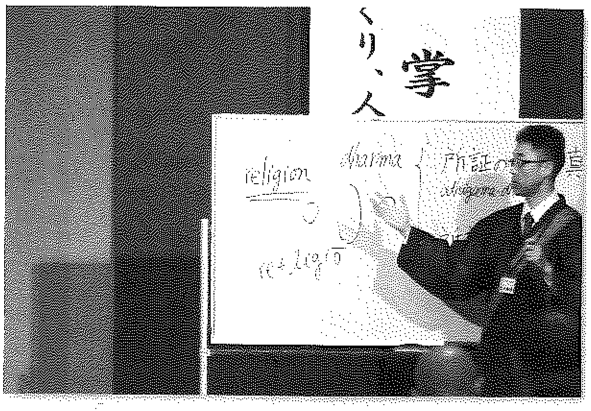
3―6．『法華経』とは何か？

法華経の目的は、散逸の方向に進み、混乱の中にあった仏教世界、これはもちろん仏教の教えと同時に、仏教を信じる仏教徒を含めてですが、そのような仏教世界をもう一度統一していくことにありました。

「宗教」に相当する英単語に「religion」ということばがあります。これはもともと「re」と「ligiō」というラテン語からできていました。「re」は「再び」という意味です。「gain」と「regain」、「fill」と「refill」みたいに、「re」というのは再びという意味があります。一方、「ligiō」とは何かというと「結びつけること」です。ですから「religon(= re＋ligiō)」とは、何らかの理由でばらばらになってしまったものを結びつけること、再結合という意味を持ちます。何らかの理由でばらばらになってしまったものをもう一度結合させていく、それが宗教の役割なのです。そして、法華経

はまさに混乱し、拡散している仏教世界を統一しようとしているんです。まさに仏教という宗教のreligionたる部分を担っているんです。

これは別のところでもお話ししたんですけれども、法華経という経典は―さまざまにある経典、処方箋はいっぱいあります、方便としての手段は―、そのうちの一つ、ワンノブゼムone of themではないんです。仏教とはどういうものかを提示する「仏教そのもの」なんです。法華経があるときに、ほかのものがあるんです。法華経以外の経典は、個別の治療薬、処方箋です。例えば、般若経は六波羅蜜や、空を説いています。涅槃経は仏性を説いています。金光明経は王様の治世と仏教の関係を説いたりしています。



でも、法華経に関しては、法華経を讃嘆するばかりで、中身がないんじゃないかとよく言われてきました。でも違うんです。法華経というのは、個別の処方箋ではないんです。個別の処方箋には個別の丸薬があります。法華経は丸薬がなくて、効能書きのみだと言われたのは、法華経はそもそも仏教とはこういうものだと提示する「仏教そのもの」だったからなんです。

法華経の原題はサッダルマ・プンダリーカと申します。サッダルマは正法、プンダリーカは白蓮華の意味です。サッダルマとは法華経のことを言っているのだ、法華経とはサッダルマなのだとすぐ短絡的に思われますが、違います。仏教の文脈で正法・サッダルマといったら、ほぼ間違いなく仏教そのものをいいます。例えば、我々サッダルマとバラモン教、こういう対比の仕方です。個別の教えをサッダルマと呼びません。個別の教えではないのです。サッダルマというのは、仏教全体のことを指します。

そして、白蓮華です。よく言われる、「蓮華の中で白い蓮華は一番いい蓮華です。一番いい白い蓮華に例えられる法華経は最高の経典です」というのは誤りです。「白が最高、最上だ」、確かにインドではそうです。でも、それはもともと肌の色で差別をするというヴァルナ制度があって、そのヴァルナがカーストのもとになります。白が最高だという発想は、カーストのもとになった差別意識なんです。仏典のどこにも、白い蓮華が一番いいなどと書いていません。逆に仏教は、生まれの差別を認めない宗教です。どんないろの蓮華でもいいんです。

では、なぜプンダリーカを使ったのか。サッダルマ・プンダリーカは「プンダリーカのようなサッダルマ（白蓮華のような正法）」という意味を持つ、後ろのプンダリーカが前のサッダルマを修飾する合成語なんです。紅い蓮華はパドマといいます。もしサッダルマ・パドマだと頭でっかちのことばになるので、プンダリーカを使ったにすぎないと思います。

実際に、従地涌出品の「不染世間法　如蓮華在水」の蓮華はパドマ、紅い蓮華のことをいっています。あそこはプンダリーカではないんです。蓮華が世間法に染まらないように、菩薩はきれいだ。別にそこでプンダリーカを使っていないということは、法華経の中に、プンダリーカが最高だという発想がもともと

ないことを示しています。

法華経がほかと比べて最高だというのは、同じ土俵でけんかしてしまっているんです。法華経は突き抜けているんです。もしくは全部を支える土台です。法華経は仏教とは何かの再提示であり、仏教そのもの、法華経なしに仏教はあり得ない。だから、法然上人の捨閉擱抛はもってのほかということで、日蓮聖人はそれを批判されたわけです。

4．諸行無常

「4．諸行無常」です。誤解されていることばです。sarvasaṃskārā anityāḥ サルヴァサンスカーラー　アニティヤーハ、これが諸行無常のサンスクリット原文です。一切のサンスカーラは一定していない。サンスカーラは形成作用です。実際にサンスカーラが直接つくるのは識なんです。認識作用をつくるんですけれども、その認識作用がどんどん広がっていって、結局自分というものができ上がってきます。ざっくり言って、サンスカーラは今これが自分だと思っている対象をつくり出すもろもろの形成力、形成作用です。

「諸行」といっているように、サンスカーラは複数あるわけです。諸行無常ということで、複数ある自分というもの、今の自分をつくっているもの、サンスカーラは変化してしまうし、変化することができる。だから、殺人鬼だったアングリマーラが生まれかわる。彼は今生において生まれかわるわけです。輪廻転生が今生において可能だというのが仏教です。諸行無常だからこそ、十界互具であり、一念三千が成立するんです。天台大師智顗が唐突に言い出したわけではなくて、諸行無常の考え方を天台大師的に発展させると、十界互具や一念三千に自然となるんです。己の中に全てがあって（己心の三千具足三種の世間なり）、それがどう発現してくるか、それをどう発現させるか、なのです。

5．曼荼羅

次にいよいよ曼荼羅に参ります。曼荼羅はこのようなつづり、maṇḍala です。nとdの下に点がついて、マンダ maṇḍa ということばからできているんですけれども、マンダということばには二つあります。一つは、ボーディマンダみたいに、菩提座、菩提道場のような場所をあらわすマンダです。もう一つは、エッセンスなどという、そういうマンダがありまして、この曼荼羅のマンダは後者のほうのマンダです。つまり、「何か本質を持っているもの」と解釈されます。

曼荼羅というと、平板になっているものを思い浮かべますけれども、これは丸、もっといえば、立体の球体です。全世界、全宇宙のことを曼荼羅と呼ぶのです。この曼荼羅世界では、東にずっと進み続けると西についてしまうんです。北に行くと南に来るんです。球形の宇宙観、世界観なので、それを自然科学が地球は丸いんだというより、仏教は遥か以前に世界、宇宙は丸いということを提示していたんです。

めくっていただいて9ページ、真言宗、東寺に伝わる胎蔵界曼荼羅です。ご存知のように、中央にあるのが主尊、大日如来です。その周囲にさまざまな尊格が配置されているわけですが、実はこれも球体です。球体の中心部に大日如来がいて、それが実際にはさまざまな尊格として、球体の表面にあらわれてくるんです。

どれが偉いというわけではないんです。全ては大日如来が形をとってあらわれたもの、つまり、大日如来は真理そのものです。先ほどと対比すると、真理と一体となって、超越して目に見えない釈尊に相当します。この地

上におりてくるのがさまざまな尊格です。それがこのように形を持ってあらわれてくるんです。そのことをあらわしたのが、この胎蔵界曼荼羅です。

諸尊が配置されていますけれども、主尊である大日如来は、本来姿のないもので、真理そのものです。それが別の姿をとってあらわれたもので、当体なんです。実は全て大日如来なんです。

これはご存じだと思いますけれども、密教に入門する場合には、結縁灌頂が行われます。これは投華得仏といいまして、華を持って、ここうやって目隠ししたまま歩かされて、そこに胎蔵界曼荼羅が置いてあるんです。そこに華をぽとんと落とすんです。すると、これのどこかに落ちるわけです。そうすると、その人はそれを自分の一番大事な尊格として、一生信仰していくのが結縁灌頂です。

実際には、落とした後にいい感じに動かすらしいです。ダーツもそうですが、人は真ん中が欲しいんです。ちなみに、弘法大師空海は大日如来に落ちたといいます。やっぱりさっと動かしたのか。あんまりぶっちゃけてもいけませんけれども。(笑)

では、10ページに参ります。実は私も今回調べてわかったんですけれども、法華経に基づく曼荼羅というのは、日蓮聖人以前からあったんです。密教の中に法華曼荼羅というのがありまして、釈尊と多宝如来が二仏並坐して宝塔があります。ただ周りにあるのは、迹門のほうですね。まだ四大菩薩が出てきていない、本門の八品の部分に至っていませんね。ただ、このように原型があって、日蓮聖人は密教も学ばれていますので、おそらくこういうものをご存じだったんだと思います。

そして、11ページに行くと、我らが臨滅度時の大曼荼羅ご本尊、妙本寺様に伝わるものです。これについて、中尾堯文先生からご講義をいただいたことがありまして、中尾先生は、本物、ご真筆の修繕に携われたそうです。すごいです。日蓮聖人の掌紋が残っているんだそうです。そんなのがあったら、ちょっと頬ずりしたいですよね。どういうふうに手を置いて、どういう順番で書かれたかというのは、掌紋のつき方でわかるんだそうです。

おもしろいのは、ご存じのように、鬼子母神様の「母」がないんです。お題目は多分最後に書かれているんです。書かれている最中、「蓮」のときに鬼子母神様の「母」がないと焦って、びやっとなったんだと中尾先生はおっしゃっていました。「蓮」のところがぐにゃっとなっています。これは「母」がないのに気づかれたのだとおっしゃっていました。お題目はどうも最後に書かれているようです。臨滅度時のご本尊で南無妙法蓮華経であります。

12ページに参ります。胎蔵界曼荼羅にしても、我々日蓮宗の曼荼羅ご本尊にしても、平面に投影されていますから、平面なのかな、上下もあるのかなと思いますけれども、曼荼羅というのは本来球体であって、転がせば、上下左右の区別がないんです。

お題目はどこにあるかというと、これだと「南無」の部分は一番上に出ていますよね。その下に全部あるように見えますけれども、実際には球体のコア、中心部、核の部分、本質にあるのです。南無妙法蓮華経は真理そのものなので、ほんとうは目に見えないんです。この南無妙法蓮華経は、本来はこっち、所証の法で、目に見えないんです。でも、日蓮聖人はあえて文字としてあらわされたんです。つまり、この南無妙法蓮華経の文字はこっち、所説の法で、真実です。南無妙法蓮華経の文字そのものは、ここにあるもの、ここにあるものは真実です。真理ではないんです。真理は凡夫の目には見えないです。我々はこの真

実の曼荼羅本尊を通して、真理へと至るのです。どれが本物の曼荼羅かなどというのはナンセンスなんです。それが真理と真実を混同するような人たちのやり方です。

一時期、どこかの板曼荼羅こそが本物だ、あとはだめなんだと言っていた方々は、いまや本尊論までかなり厳しくなってしまいました。でも、あの発想こそが真理と真実を混同してしまっているんです。我々にとって、南無妙法蓮華経を中心としたご本尊は、真理そのものではありえません。真実なんです。我々はご本尊を通して、目に見えない真理と向かい合わせていただいているわけです。だから日蓮聖人は、本来目に見えない南無妙法蓮華経をあえて具象化して、形而下におろしてくださったんです。真理の具象化です。それが真実の曼荼羅御本尊です。

お題目は球体の中心であって、形而上の真理そのもので、文字ではありません。あえて文字になっているのは、もはやもう具象化されているので、これは真理ではないんです。これが真理だとやってしまうと、どの曼荼羅がほんとうなんだということで、真理と真実を混同し非仏教的になってしまいます。

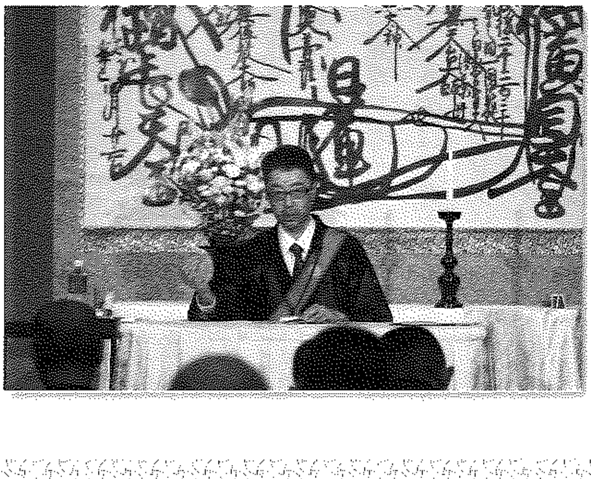
目に見えない真理が、今度は球体の表面上に、形而下の存在として具象化されます。つまり、久遠実成の釈尊なるものは、本来は真理そのものと一体化し、目に見えない存在なんです。それが、この形而下の世界にあらわれてくださってるんです。

そして、実は我々もそうなんです。大曼荼羅ご本尊では、主尊がお題目、南無妙法蓮華経であり、その他の諸尊が南無妙法蓮華経の当体です。そして、私たちはこの曼荼羅に向かい合うとき、球体の一部の表面上にちゃんと位置しているんです。曼荼羅の境界線は、我々のところまできます。球体です。

曼荼羅に向かって南無妙法蓮華経を唱えるとき、我々はこの球体の表面にあらわれた当体蓮華となるんです。具象化された南無妙法蓮華経です。それは、真理そのものではありません。でも、真理へと向かう、真実の救済手段である南無妙法蓮華経を唱える地涌の菩薩として、球体の表面（現実世界）にあらわれてくる。そうすると、我々は球体の表面に地涌するんです。球体中心部分から出てくるんです。それが本質（マンダ）たる、内なる虚空界です。そこからこの地上に出てくるんです。具象化してくるんです。それが地涌の菩薩です。我々は曼荼羅に向かい合うときに、間違いなく地涌の菩薩として存在しているんです。具象化された南無妙法蓮華経が地涌の菩薩です。大曼荼羅ご本尊に向かい合う全存在が具象化された南無妙法蓮華経です。

ただし、これは重ねて注意喚起をさせていただきたいんですけれども、目に見える、この形でのお題目や曼荼羅は、あくまで形而下の存在です。具象化された対象であって、これは真実のものですけれども、真理そのものではありません。このことを誤解すると、排他的で独善的な法華信仰となってしまいます。

小さいころから南無妙法蓮華経には力があるのだ、正しいのだと教わって育って参りました。私の師父は法華経や御祖師様に対する信仰をかなり持っていたと私



なりに思っています。自分も、南無妙法蓮華経には力があるんだろうなと幼心に思っておりました。

　ところが世の中には、どうも同じ南無妙法蓮華経を唱えるのに「よろしくない団体」があるらしいというのを聞きました。その人たちは間違っているのだと師父は言うわけです。私が思ったのは、いや、南無妙法蓮華経にものすごくパワーがあるんだったら、誤った考え方を持っている人たちも、南無妙法蓮華経を唱えているうちに、自然と治っていくんじゃないかと。でも、全然治らないんだと。では、南無妙法蓮華経に力はないのかというと、師父は、いや、あると言うんです。何で彼らは治らないのか、そのあたりがよくわからなくなってしまったんです。他のいろいろなお坊さんにも伺ったことがあるんですけれども、失礼ながら、どなたからも満足のいく答えが得られなくて、よくあるのが、おまえは、ことばばかりだ、やればわかると、そうなのかなと思っていました。

　でも、私なりの答えをやっと見いだすことができました。お題目やご本尊様、目に見える形になっているものを真理と履き違えると、排他的、独善的になっていく。一方、これを真実の手段として受け取って、それに向かい合って、これを通して真理へと歩んでいくんだ、というのが本当の仏教であり、本当の法華信仰なのだと。

　真実はいっぱいあっていいわけです。真理は一つしかないかもしれません。でも、真実はいっぱいあっていいんです。「真実はいつも一つ」という漫画やアニメは、仏教的には間違っています。事実は一つしかない。ファクトは一つかもしれません。でも、真実はいっぱいあっていいんです。「これしか真実でない」というのは真実と真理が一体化した一神教的な発想です。

　私は一神教が悪いと申し上げているわけではありません。一神教的な感覚で仏教を見る態度はよろしくないと申し上げているんです。一神教には一神教の立場があるでしょう。でも、仏教は一神教的なものの見方をしてはいけない宗教なんです。そこに一神教的な発想を持ち込むのは間違いなんです。なのにそれをするから、これが正しい、あれが間違っているとなり、排他的で独善的になってしまうんです。

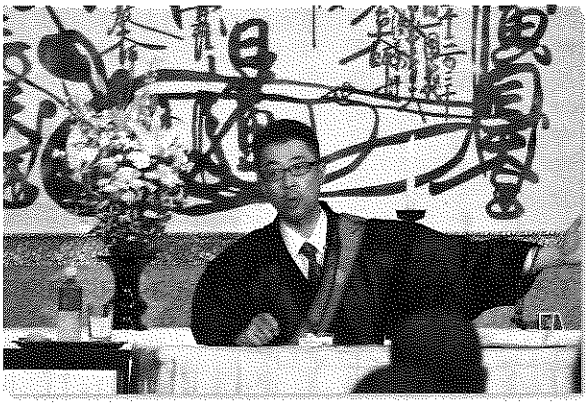
6．世界は統一されたか

「6」です。世界は統一されたでしょうか。世界の統一を、曼荼羅を通して日蓮聖人は目指されました。では実際、世界は統一されたでしょうか。正しい法華信仰を持つ者の視点から見れば、全世界は大曼荼羅ご本尊に包摂されているわけです。

　例えば、諸行無常の考え方にのっとれば、キリスト教徒というのは、現在キリスト教徒であるその人をつくるサンスカーラが発動されているんです。一方、ムスリムの人は、現在ムスリムであるその人をつくるサンスカーラが発動されているんです。違いは、サンスカーラの出方にすぎなくて、サンスカーラは変わり得るものだから、その違いは永遠ではないということになります。

　諸行無常の発想があるから、十界互具、百界千如、一念三千になって、それが事の一念三千、南無妙法蓮華経になり、曼荼羅ご本尊となるんです。もとは全部諸行無常です。諸行無常があって、全てを包んでいくからこそ、曼荼羅によって全てを包んでいるんです。

　ただ、そこだけに終わるのであれば、やはり理念的なんです。キリスト教やイスラームの発想と本質的にそう違わない。彼らも全て



のものは神が造ったんだ、全ては統一されている、統一されなければならないのだ、という理念を掲げているからです。

　未信徒の方、異教徒をどうするのか。どうすれば、「一天四海　皆帰妙法　末法萬年　広宣流布」は実現するのか。「いや、今信じなくても、未信徒、異教徒には下種結縁でいいんじゃないか。」と言われたことはいっぱいあります。

　例えば、「現実的に今キリスト教徒やムスリムの方が仏教徒になるのは難しいかもしれない。でも、南無妙法蓮華経を聞かせることで下種結縁する、それでいいんだ。」と。でも、それでほんとうにいいんでしょうか。失礼ですが私にはどうしても、何か単なる自己満足、もしくはできないことの言いわけのような気がするんです。もうちょっと何かできるのではないか。

　これはもう私の考え方ですけれども、まずは阿説示、アシュヴァジットに見習いたいわけです。ご存じのように、アシュヴァジットは舎利弗と目連を仏教に導いた人です。五比丘の一人です。釈尊の最初のお弟子さんの一人です。

　この方は別に教えを説いたわけではないんです。王舎城の町を托鉢して歩いていたんです。そのころ舎利弗は幼なじみの目連と一緒に別の外道のところで修行をしていましたけれども、どうもこの教えはいま一つだ、どこかにもっといい師匠はいないだろうか、もし、いい師匠に出会ったら、必ず紹介し合おうねと約束し合っていました。そして、舎利弗は王舎城の町中で、托鉢するアシュヴァジットを見るんです。アシュヴァジットは何も教えを説いていたわけではないんです。ひたすら托鉢していただけなんです。でも、非常に清らかなその姿、そして、落ち着いた様、堂々とした威容、威厳に打たれるんです。この人はただ者ではない、と。

　当時、舎利弗は外道です。異教徒だったんです。でも、その異教徒に教えではなく、まさに体を通して説法したんです。そして、「あなたは何者ですか。」「私は仏教を学んでいる者です。」「仏教って何ですか。」「私にはとても説くことはできませんが、私の師匠はお釈迦さまと申します。」「ぜひ会わせてください。」となったわけです。

　これが仏教の基本なんだと思います。もちろん話したりお経を読んでわかってくれるという場合には、言説布教や祈禱も大事だと思います。ただ、それではわかってくれない人もいるわけです。その場合には、我々の生きざまを通して、ああ、この人は何てすごいんだろうと興味を持ってもらう、ここから始めるしかないんじゃないかと思っています。

　わかってもらえなくてもいいと思うんです。一方的に南無妙法蓮華経を聞かせて、下種結縁だ、ではないんです。少なくともああ、あの人、すごいな、自分はあの教えはわからないけれども、あの人はいい人だね、すごい人だね、これが大事なんじゃないかと思うんです。

　そのためには、我々が仏教徒としてきちんと振る舞って、ああ、お坊さん、さすがすごいね、仏教っていいんじゃないかと思ってもらわなければならないわけです。それがほんと

うの意味で、我々が体で体現し、布教する、色読していくということなのではないかと思っております。

6―1．仏教世界の統一

「6の1．仏教世界の統一」です。法華経あるとき仏教あり、法華経なきとき仏教なし、つまり、法華経があるとき、南無阿弥陀仏も坐禅も南無大師遍照金剛もありなのです。仏教そのものですから、その枠を壊してしまって、南無阿弥陀仏だけでいいんだという姿勢を日蓮聖人は批判されました。

そう考えると、道元禅師というのは法華経を一生懸命読んでいらっしゃいます。ご自分の死が間近なときに、如来神力品をずっと読まれています。まさに知るべし、このところは、すなわちこれ道場なり、あの部分です。

日蓮聖人の批判というのは、当初のところは、専ら法然上人の捨閉閣抛、選択本願念仏集に向けられていたわけです。

実際問題として、我々は他宗の方々と触れ合います。そのときどういう態度で接するか。日蓮聖人がそうおっしゃったから、四箇格言だから、つき合わないという態度をとりたいのだという方があれば、あえて否定はしません。ただ、私は、そういう生き方はしないです。法華経は仏教そのものだからです。私が見ている範囲では、わりと両極端があるようです。一つは他宗とはつき合わないよという態度です。もう一つは、もう時代も変わったのだから、つき合わないとしようがないじゃないかという態度です。でも、私が思うには、どちらも少し違うんじゃないですかと。つき合わないというのは一つあり得ることかもしれませんけれども、時代も変わったんだからというのはどうかなと思うんです。あまりになし崩しではないでしょうか。その場合には、つき合う理由がなければならないと思います。

法華経のない方々は、厳密にいえば仏教徒ではないことになります。その仏教徒でない方々を仏教徒にしてさしあげる役割が我々にあるわけです。そういうつもりで私は他宗派の方と、―そんなことは口に出しては言いませんが―、でも、何か時代もこうだからと無自覚でつきあうという、少なくともそれはおかしい気がするんです。

なぜ我々がほかの宗派の方々とおつき合いするのか。それはその方々、そして我々を含めて、全てを仏教徒にしていく、ほんとうの意味での仏教徒、本来の仏教に戻すためにやっているんだという意味で、積極的におつき合いさせていただいてはいかがでしょうか。でもその場では、そんなことを口や態度に出さないほうが、奥ゆかしいです。（笑）

6―2．全世界の調和に向けて

「6の2．全世界の調和に向けて」、いよいよ最後です。大曼荼羅ご本尊にあらわされた当体蓮華は、諸仏菩薩はいうに及ばず、インドの論師たる龍樹、中国の天台大師、日本の伝教大師、凡夫たる阿闍世王、畜生たる龍女、そして、仏教以外の尊格である天照大神まで含んでいます。全てを含んでいるんです。

日本仏教の中には、たとえば神社などにお参りしてはだめだという宗派もあります。でも、日蓮聖人の大曼荼羅ご本尊は、日本の神様のトップである天照大神を押さえていますから大丈夫です。しかも、当体蓮華の佛としてこの世にあらわれているわけです。全てを含んでいるんです。

よく三国伝来の仏教と言われます。日蓮聖人の時代は、世界は天竺、中国、日本で、その三国のさまざまなものを入れていた。当時の三国のありとあらゆるものを網羅しようとされたわけです。精神的な世界観からいうと、

十界全てをです。また、物理的な世界観からいうと、全世界を入れようとされているんです。ですから、現代風に見るならば、単に天竺と中国と日本のみならず、日蓮聖人の意図を酌めば、全世界を網羅されようとしたわけです。ですから、ここには、精神的、物理的両面の全世界のありとあらゆる存在が網羅されているわけです。

13ページです。そして、それら全てが南無妙法蓮華経の当体としてあらわれ出ているわけです。ああ、全てのものが南無妙法蓮華経の当体なのだ、私もあなたも全部南無妙法蓮華経の当体なのだ、こういう世界観です。世界観が三国ではない、進展した今日、大曼荼羅ご本尊には、今日の全世界が網羅されていると理解すべきです。なぜならば、日蓮聖人は全世界を網羅しようとして、大曼荼羅ご本尊を開顕されたからです。

曼荼羅は球体です。二次元の紙にあらわすと、本質である大日如来やお題目が、中央や最上部に描かれてしまいますけれども、曼荼羅が球体である以上、実際には上も中央もなく、全ては平等であり、等価値です。

そして、その根本にあるのは、常に諸行無常です。衆生は、今自分が「これが自分だ」という自分をつくるサンスカーラを制御することによって、菩薩にもブッダにもなれます。でも、制御できないと地獄にも堕ちます。諸行無常だから、十界互具が成立するんです。そして、ブッダの状態を常に続けられる人がブッダなんです。

ブッダという存在は、成仏すれば、はい、おしまいという存在ではなく、この「根元的身勝手さ」である無明を制御して、サンスカーラを制御し、ブッダである自分をつくり続けられる人です。ですから、釈尊は成仏した後も無明が残っているんです。なくなっていません。でも、無明が暴れ出さないようにすぐ抑え込みます。仏典を読めば、魔としてあらわれています。仏典は、釈尊の中にある無明が具象化したものを魔と表現しているんです。そして、釈尊は常に、例えば、墓場に行って、朽ち果てる遺体を見ながら、自分が今持っている肉体に執着する気持ちを抑える修行をされています。

そして、入滅間際に、釈尊はご自分のことを沙門とおっしゃっています。務め励む人という意味です。無明、そしてサンスカーラを制御して、「ブッダとしての自分」をつくり続けた人がブッダです。だから、我々も一瞬ブッダには成れるんです。でも、なかなか続かない。つまり、お題目、南無妙法蓮華経を唱えている瞬間に、我々は即身成仏しているんです。でも、唱題が終わってしまうと、またもとに戻ってしまうかもしれない。だから、ほんとうの南無妙法蓮華経というのは、唱えることを含めて、生活そのものが南無妙法蓮華経になっていることなんです。それがほんとうの意味での即身成仏です。ただ、言うは易く、行なうは難し、です。

「諸悪莫作　衆善奉行　自浄其意　是諸仏教」―悪いことをするな、善いことをしろ、心を清めよ、これが諸仏の教えである。―これは三歳の子供でもわかるけれども、実行するのは八十の老僧でも難しいというお話がありますよね。

ゴールは見えているんです。何をやるかも見えているんです。あとはそれを自分自身でどうやっていくかです。サンスカーラを制御すれば、成仏できます。でも、制御しなければ、三悪道に堕ちた自分をもつくってしまうんです。

仏教徒、キリスト教徒、ムスリムの違いは、仏教的に見れば、サンスカーラの発動のされ方の違いにほかならないんです。実はみんな

同じなんです。キリスト教徒やイスラーム教徒も、この蓮華の中にちゃんと入っているんです。ここでは表現されていないだけです。

キリスト教は異教徒の存在を認めません。異教徒はいてはいけないんです。異教徒が地獄に堕ちたらかわいそうだと思って、入信改宗を勧め続けるんです。迷惑なほどに勧めてきます。

一方、イスラームは、ムスリムを攻撃しないんだったら、異教徒と共存することもいい。なので、イスラミック・ステイトというのはとても間違っているんですよ。イスラームという宗教は、異教徒がいるというのが前提ですから、無理に改宗を勧めない。これは、きちんとクルアーンで定められています。ただ、それは相手を尊重しているからではないのです。けんかすると損だから、異教徒は地獄に堕ちてもいいじゃないか、と。

キリスト教、イスラームどちらも、異教徒は地獄に堕ちるんです。でも、キリスト教徒は、異教徒を地獄に堕としたらかわいそうだから、入れ、入れ、入れと言ってくるんです。ムスリムは、異教徒は地獄に堕ちてもいいじゃないかと、もう突き放しているんです。

仏教はどちらとも違います。全ての者をこの中に取り込みます。しかも異教徒は異教徒のままで。違いはサンスカーラの出方の違いにほかならないからです。全てを曼荼羅ご本尊の中に取り込む。それができるのは、全世界を網羅しようとした曼荼羅ご本尊しかないんです。密教の曼荼羅では難しいんです。この曼荼羅ご本尊でなければ、全ての世界を含めません。密教の曼荼羅はインドのいろいろな諸尊は取り込んでいます。一方、曼荼羅ご本尊は全世界を取り込んでいるんです。これは、日蓮聖人が開顕された曼荼羅ご本尊のみの特徴です。

仏教は、さらに申し上げれば、日蓮宗の教義は、宗教観の違いを乗り越える可能性を持っているんです。仏教イコール法華経です。ぜひこの姿勢でがんがん行きながら、「一天四海皆帰妙法」を実現させて参りましょう。

「お題目だけ」ということばは、悪い意味で使われます。「お題目だけ」と言われると、「お題目って大事なものなんだ、そういうふうに使うな」と我々は文句を言います。でも、お題目だけということばをそういうふうに通用させてしまっているのは、ひょっとしたら我々の怠慢のせいなのかもしれません。「言うばっかりでちっともやらないじゃないか」と。ほんとうの意味で、「一天四海　皆帰妙法　末法萬年　広宣流布」は、この筋にのっとれば、絶対できると確信しております。ぜひ一緒に歩ませていただければと存じます。長時間にわたりご清聴を賜り、どうもありがとうございました。（拍手）

日蓮宗全国布教師連合会第40回代表者会議（総会）近畿教区大会研修講演資料
平成27年6月11日　於：ANAクラウンプラザホテル神戸

宗祖の教えと世界平和
―曼荼羅と南無妙法蓮華経と私たち―

山口県立大学
善應院　鈴木 隆泰

０．ポイント

『法華経』は「仏教世界の統一」を試みた経典です。一方、宗祖は大曼荼羅（全世界、全宇宙）御本尊を開顕し、お題目の下に「全世界の統一」を目指されました。曼荼羅の意味、および諸行無常を真に理解し実践することで門下のわれわれは世界平和に貢献できると信じています。

１．沈黙する釈尊、梵天による勧請　→　説法の決意

私が覚ったこの〈縁起〉の理法は、甚深であり、見がたく、理解しがたく、寂静で、卓絶しており、思弁できる領域を超え、微妙であり、賢者のみが体験できるものである。ところが衆生たちは、アーラヤ（これまでの経験・体験・言語習慣）を楽しみ、アーラヤを喜び、アーラヤに執着している。しかし、アーラヤを楽しみ、アーラヤを喜び、アーラヤに執着している衆生たちにとって、この境地、すなわち〈縁起〉の理法は見ることはできない。さらに彼らには、一切のサンスカーラ[1]の寂滅であり、一切の執着対象を捨て去ることであり、渇愛の滅尽であり、貪欲を離れることであり、寂静の境地である涅槃もまた見ることはできない。たとえ私が教え（法）を説いたとしても、他の人々は私の言うことを理解してはくれないだろう。そうだとしたら、私には〔伝わらないという〕悩みと〔やっぱり伝わらなかった〕という徒労感のみが残ることとなるだろう。（*Vinayapiṭaka* i. 4.33-5.6）

私が難行の末にやっとのことで証得した〈縁起〉の理法を、今や説く必要は何もない。貪りと瞋りに打ち負かされている者たちには、この理法を覚ることなどできないからだ。それは、流れに逆らって川を遡るようなものであり、甚深、微妙、難見、微細である。貪欲に染まり、闇黒に覆われている者たちは、とうてい見ることができない。（*Vinayapiṭaka* i. 5.8-11）

〔誰も体験したことのない覚りを無理矢理ことばで伝えようとすると、〕人々を悩害するおそれがある。（*Vinayapiṭaka* i. 7.6）

---

[1] saṃskāra。〈自分〉形成作用・〈自分〉形成力。諸行無常の「行」の原語。詳細は拙著『本当の仏教　第１巻』（興山舎、2014）を参照されたい。

日蓮宗全国布教師連合会第40回代表者会議（総会）近畿教区大会研修講演資料
平成27年6月11日　於：ANAクラウンプラザホテル神戸

ああ、世間は滅んでしまう。ああ、世間は完全に滅んでしまう。正しく覚ったブッダが沈黙することに気持ちを傾けてしまい、説法しようとされないとは。（*Vinayapiṭaka* i. 5.15-17）

世尊はどうぞ法をお説き下さい。善逝はどうか法をお説き下さい。衆生の中には、汚れの少ない類の者たちもおります。その者たちは法を聞かないと退歩し〔汚れの多い者たちとなっ〕てしまいますが、〔もし聞けば〕法を理解してくれます。（*Vinayapiṭaka* i. 5.24-26）

願わくはこの甘露の門をお開き下さい。〔汚れの少ない者たちは〕汚れなき者によって覚られた法を聞かねばなりません。（中略）遍く観察できる眼を備えたお方よ、あなたはすでに無明を退治されたのですから、〔〈縁起〉を自分一人で観察して自受法楽を続けているだけでなく、〕いまだに無明に覆われ、生・老〔・病・死〕に打ち負かされている人々をも、法でできた高楼に登って観察して下さい。勇者よ、お起ち下さい。〔世間を超えた涅槃の境地のみに留まり続けることなく〕世間で活動して下さい。世尊は法をお説き下さい。法を理解してくれる者もきっとおりましょう。（*Vinayapiṭaka* i. 5.31-6.4）

そこで、梵天の〔三度に渡る〕勧請を受けた世尊は、衆生に対する慈悲心により、仏眼をもって世間を観察した。（*Vinayapiṭaka* i. 6.23-25）

世尊が仏眼をもって世間を観察したところ、衆生には汚れが少ない者も、汚れが多い者も、鋭敏な者も、鈍重な者も、性根の善さが様相に表れている者も、性根の悪さが様相に表れている者も、導きやすい者も、導きにくい者もおり、またある者たちは、〔ヒンドゥー・バラモン教的に〕来世におよぼす〔現世の〕罪過の恐怖〔ばかり〕を考えて暮らしているのが見えた。それはちょうど、青蓮華の池や紅蓮華の池や白蓮華の池において、ある青蓮華や紅蓮華や白蓮華は〔泥〕水中に生じ、水中で育ち、水面に到達することなく、水中に沈んで繁茂するし、ある青蓮華や紅蓮華や白蓮華は水中に生じ、水中で育ち、〔なんとか〕水面のところまでは達するし、そしてある青蓮華や紅蓮華や白蓮華は水中に生じ、水中で育ち、水面を超えて伸び、そして〔泥〕水によって汚されることがないようなものであった。（*Vinayapiṭaka* i. 6.25-36）

〔私の説法を聞ける〕耳を持った者たち、彼らに〔だけ〕甘露の門は開かれた。〔これまでの、アーラヤへの執着や世俗の〕信仰を捨てよ。〔さもないと〕人々を悩害するおそれがあると考え、私は素晴らしい勝れた法を説くことを躊躇っていたのだ。（*Vinayapiṭaka* i. 7.4-7）

日蓮宗全国布教師連合会第40回代表者会議（総会）近畿教区大会研修講演資料
平成27年6月11日　於：ANAクラウンプラザホテル神戸

◇　真理（形而上の涅槃・覚り）そのものではなく、真理に至る手段を「法、教え」として説く。初転法輪。

◇　手段：方便 upāya。釈尊の説法は真理（涅槃・覚り）そのものではない。全ては方便（人々を真理へと至らせる、真実の救済手段）。

仏教では「真理」と「真実」を峻別する

2．小乗仏教と大乗仏教

小乗 hīnayāna：×小さな乗物　〇劣った乗物
大乗 mahāyāna：×大きな乗物　〇立派な乗り物・勝れた乗物

成仏・無上菩提へ辿り着けるかどうかが小乗と大乗の差違。

小乗：成仏を目指さずに、それで仏教と呼べるのか。
大乗：「絶対に成仏できない者」を認めて、それで仏教と呼べるのか。

3．『法華経』―仏教世界の統一を試みた経典

3－1．「方便品第二」

「方便品」*Upāyakauśalyaparivarta*（巧みな救済手段（善巧方便）についての章）

3－2．〈梵天勧請説話〉と「方便品」との共通項

・　釈尊の出定。
・　仏智の難解性の強調。
・　梵天、舎利弗による勧請。三止三請。
・　教えが万人に通じるわけではないこと（汚れた蓮華、五千起去・秘要とせよ）。
・　衆生に対する大いなる慈悲心（慈悲心に基づく衆生観察・一大事の因縁）。
・　仏教とは何かが示されている点。
・　三止三請に続く初転法輪と第二の無上の転法輪。

3－3．「方便品」が説く、無上菩提に向けた修行

未来世にも、幾千万もの思議することもできないほど多くの無量の諸仏があろうが、彼ら最上の世間の保護者である諸仏もまた、この〔ような種々の〕方便を

示すであろう。彼ら〔未来世の〕世間の導師たちには無量の善巧方便があって、それを用いてこ〔の世間〕において、幾千万もの生命あるものたちを、無漏の仏智へと導くであろう。彼ら〔諸仏〕の教えを聴いて、ブッダと成らないような衆生は、いかなる時もただの一人としていない。なぜならば、“私は〔自らが〕覚りへ向けて修行した後に、〔他の者をも覚りへ向けて〕修行させよう”というこのことが、諸々の如来の〔共通の〕誓願だからである。(***SP***$_S$ 52.12-53.4)

全ての仏道修行のゴールは無上菩提

仏教とは、
・ 仏の説いた教え。
・ 仏に成るための教え。

ところが、
・ 成仏を目指さない小乗仏教徒
・ 小乗仏教徒から成仏の可能性を奪い去った、それ以前の大乗仏教徒

双方とも自らの獲得したアーラヤに固執し、「仏教は仏に成るための教え」という大前提を忘れてしまっていた。「方便品」は彼らに対し、「仏教とはそもそも何か（仏の説いた教えであると同時に、仏に成るための教えであること）」を思い出させようとしている。

３－４．永遠の釈尊

「如来寿量品」を中心とする「永遠の釈尊、久遠実成本師釈迦牟尼仏」
「方便品」の一乗思想と並び、『法華経』の中核的思想と考えられてきた。

でも実は、

釈尊の永遠性を説いたのは、**『法華経』が初めてではない**

ヴァッカリよ、法を見る者は私（＝釈尊）を見る。私を見る者は法を見るのである。(*Saṃyutta-Nikāya* iii. 120.28-29)

ヴァーセッタよ、如来は次のように呼ばれるのである。いわく、法を身体とするもの（法身 dhammakāya)、(中略）法そのもの（dhammabhūta）であると。(*Dīgha-Nikāya* iii. 84.23-25)

日蓮宗全国布教師連合会第 40 回代表者会議（総会）近畿教区大会研修講演資料
平成 27 年 6 月 11 日　於：ANA クラウンプラザホテル神戸

アーナンダよ、お前たちは「教えを説かれた師は亡くなられてしまった。私たちの師はもういらっしゃらないのだ」と思うかも知れない。しかし、アーナンダよ、そのように考えてはならない。私がお前たちのために説いた法と制定した律、それが私の滅後にはお前たちの師なのである。（*Dīgha-Nikāya* ii. 154.5-9）

〔ミリンダ王〕「尊者ナーガセーナよ、ブッダは実在するのですか」

〔ナーガセーナ〕「はい、大王よ。〔釈迦牟尼〕世尊は実在します」

〔ミリンダ王〕「尊者ナーガセーナよ、そうであるならば、“ここにある”とか“そこにある”とかいって、ブッダを示すことはできるのですか」

（中略）

〔ナーガセーナ〕「大王よ、（中略）すでに入滅された世尊のことを、“ここにある”とか“そこにある”とかいって示すことはできません。（中略）大王よ、しかしながら、世尊を〈法を身体とするもの（法身 dhammakāya)〉として示すことはできます。大王よ、なぜならば、法（教え）は世尊によって説示されたものだからです」（*Milindapañha* 73.9-22）

釈尊　＝　法身、教え

アーナンダよ、転輪聖王の遺体の処置と全く同様の方法で、如来〔である私〕の遺体も処置されなければならない。交通の要所には如来のストゥーパを建立せよ。誰であれ、そこで華や香料や顔料を献げて礼拝したり、心を浄めて信じるならば、そのことによって彼らには、長きに亘り、利益と安楽がもたらされるであろう。（中略）

如来・応供・正遍知はストゥーパを建立されるに相応しい。（中略）ではアーナンダよ、どのような道理にもとづいて、如来・応供・正遍知はストゥーパを建立されるに相応しいのであろうか。アーナンダよ、「これがかの世尊・応供・正遍知のストゥーパなのだ」といって、多くの者たちが心を浄めて信じる。彼らはストゥーパの前で心を浄めて信じたことで、死後、現在の身体を失った後に、善趣である天界へと生まれ変わるのである。アーナンダよ、まさにこの道理にもとづいて、如来・応供・正遍知はストゥーパを建立されるに相応しいのである。（*Dīgha-Nikāya* ii. 142.8-24）

如来の身体は金剛のようである。〔私の滅後には〕この身体を砕いて芥子粒ほど〔の遺骨〕にして世間に広く行き渡らせよう。そうすれば、未来（如来滅後）の篤信者は如来の姿・形を見ることはできなくても、これ（私の遺骨）を供養する

ことができるだろう。これを供養すれば、四姓家や四天王や三十三天や（中略）自在天や他化自在天に生まれるという福徳も得られるだろうし、また、（中略）阿羅漢や独覚にもなれるだろう。もしブッダと成ることができたとしても、それもやはりこの〔遺骨供養の〕おかげなのである。（『増一阿含経』751a11-19）

遺骨 dhātu　＝　本質 dhātu

釈尊の遺骨（＝釈尊の本質）を納めた仏塔（ストゥーパ、卒塔婆）は、釈尊のお墓ではなく、生ける釈尊そのもの（Bareau [1962]、ショペン［2013]）。

釈尊の遺骨を納めた仏塔　＝　色身の釈尊

ただし、肉体を持った色身の釈尊が紀元前5世紀に入滅したように、姿・形を持つ仏塔も、同様に壊れやすい。しかも、仏塔は釈尊とは異なり、説法を通した衆生教化・衆生利益を施してくれない。

釈尊は法身、教えとしてこの世に留まり続けているのに、釈尊滅後の仏教徒たちは、阿弥陀仏など他世界の諸仏を求めたり、壊れゆく色身であり、無言のブッダたる仏塔に対する供養に傾注する。

常説法教化・常住此説法・為説無上法・乃出為説法・在此而説法・為説種種法
「如来寿量品」に説かれる永遠の釈尊は、説法と一体化した存在。
「如来寿量品」は彼らに、「釈尊は法身として、教えとして、永遠にこの世に現存していること」を思い出させようとしている。

３－５．『法華経』はやっぱり凄い（拙稿。宗教文化誌『法華』1062所収、2014）

私たちが生きていくためには、水と空気は欠かすことができない。それは誰もが知っている。私たちの生命維持に不可欠にして、最も大切なもの、その代表が水と空気である。ところがそれほどまでに重要な水と空気であるにもかかわらず、私たちが日常生活の中で、水や空気があることに感謝することはほとんどない。実際、蛇口を捻ればいつでも水は出るし、息を吸えばいつでも空気を吸入することができる。いわば、水や空気は私たちにとって、「あって当たり前のもの」に過ぎないのである。しかし、本当に大切なものがすでに手元にあるというのに、それに感謝できないということ、言い換えれば、すでに手元にある「幸福、幸せ」に気づくことができないということは、実はとても悲しく残念なことなのではないだろうか。

日蓮宗全国布教師連合会第40回代表者会議（総会）近畿教区大会研修講演資料
平成27年6月11日　於：ANAクラウンプラザホテル神戸

ところで、当たり前すぎて注意を払わないどころか、あまつさえそのこと自体を忘れてしまった人たちがいた。他ならぬ、仏教徒たちである。釈尊は無上菩提を得てブッダと成った後、躊躇する心を乗り越えて、衆生を自分と同じ境地に至らせようと説法を開始した。仏教が「ブッダが説いた教え」であると同時に「ブッダに成るための教え」とよばれる所以がここにある。ところが仏教徒のうちの多数派は、成仏は特別な者にしか達成することはできず、通常の仏弟子が至れるのは「阿羅漢」という聖者の位どまりと考えるようになった。〝誰もが成仏できる〟という「仏教にとっての大前提、当たり前のこと」が忘れ去られただけでなく、成仏は到達不可能なものへと位置づけが変えられてしまったのである。

仏教徒たちが忘れたのはそれだけではない。それは、「釈尊が永遠の命を持っている」ということである。もちろんこれは、釈尊が「不老不死の仙人」であることを意味するものではない。これまでの様々な研究で明らかにされているように、実は釈尊は初期仏典（原始仏典）の段階からすでに「普通の人間」とは見なされておらず、「真理・教え（法）を身体とする者」「法と一体となった者」と考えられていた。後代の術語を用いれば、釈尊は仏教の最初期から一貫して「法身」であったのである。肉体を持った「色身としての釈尊」はこの世から滅したとしても、仏弟子たちは真理（縁起の理法）そのものや、教えそのものである「法身としての釈尊」に、いつでも向かい合い、尊敬・崇拝することが可能であったのである。ところが釈尊入滅後の仏弟子たちは、せっかく法身として釈尊が永遠にこの世に現存し続けてくれているというのに、仏舎利を納めた仏塔（ストゥーパ、卒塔婆）を色身の釈尊として崇拝するようになってしまった。ところが仏塔は色身の釈尊である以上、時間の経過とともに朽ちていくという宿命にある。そのうえ物質である仏塔は、「もの言わぬ、説法してくれぬ釈尊」でもあった。そこで一部の仏教徒たちは、現在も説法し続けるという他世界の諸仏（阿弥陀仏が代表例）を求めるようになった。この世に法身として釈尊が現存しているにもかかわらず、それを忘れ、他の世界のブッダを崇拝するようになったのである。

そこで『法華経』は、仏教徒たちが忘れてしまった「仏教の常識、当たり前のこと」を思い出させるため、まず「方便品」で一切衆生は成仏可能であり、阿羅漢どまりなのではないと教えた。また「見宝塔品」では、『法華経』を説いた釈尊を仏塔たる多宝如来に讃歎させ、二仏並坐させることで仏塔崇拝を包摂するとともに、他世界の一切諸仏を釈尊の分身とすることで、拡散した諸仏の観念を釈尊に再統一しようとした。そして「如来寿量品」において、「常にこの世にあって法を説き続ける、法身たる釈尊」が開顕されたのである。このように、多くの仏教徒たちが忘れていた〝本来の仏教〟を再提示した『法華経』は、もはや一経典と

日蓮宗全国布教師連合会第40回代表者会議（総会）近畿教区大会研修講演資料
平成27年6月11日　於：ANAクラウンプラザホテル神戸

いう枠に収まりきるものではない。いわば『法華経』は、〝仏教そのもの〟ともいえるであろう。

私たちにとってとても大切なのに、そのありがたさを普段忘れている存在が、水や空気以外にもある。それは「家族」である。おそらくこの世の中に、家族で揃って食卓を囲むこと以上の幸せはないと筆者は思っている。「如来寿量品」の「良医の喩え」が、〝最愛の父親の死〟が示現され、その悲しみを通して子供たちが薬を服用し病が治るという筋立てとなっているのは決して偶然ではない。〝仏教そのもの〟であると同時に、私たちに本当の幸せとは何かを教えてくれる『法華経』は、やっぱり凄い経典なのだと改めて感じる。

３－６．『法華経』とは何か？

◇　『法華経』の目的：散逸の方向、そして混乱の中にあった仏教世界の統一。
◇　『法華経』以外の経典：個別の治療薬・処方箋。
◇　『法華経』の原題：*Saddharmapuṇḍarīka*。saddharmaは正法、puṇḍarīkaは白蓮華。
◇　saddharma（正法）≠『法華経』。
◇　saddharma（正法）＝仏教。
◇　白蓮華≠最高の蓮華。〝白が最高、最上だ〟→生まれによる差別そのもの。
◇　『法華経』：仏教とは何かの再提示。仏教そのもの。
◇　『法華経』なしに、仏教はありえない。「捨閉閣抛」はもってのほか。

４．諸行無常

・　sarvasaṃskārā anityāḥ（一切の〈サンスカーラ〉は一定していない）
・　〈サンスカーラ〉：自分が今「これが自分だ！」と思っている対象を作り出す諸々の形成力・形成作用
・　「諸行」＝〈サンスカーラ〉は複数ある。
・　「諸行無常」＝複数あるそれら諸々の〈サンスカーラ〉は、変化してしまう、変化しうる。

◇　殺人鬼アングリマーラの“生まれ変わり”。
◇　諸行無常だからこそ、十界互具・一念三千が成立する。

５．曼荼羅

maṇḍala：球体。全世界。全宇宙。
東に進み続けると西に着く。球形の世界観、宇宙観を自然科学に先立って提示。

日蓮宗全国布教師連合会第 40 回代表者会議（総会）近畿教区大会研修講演資料
平成 27 年 6 月 11 日　於：ANA クラウンプラザホテル神戸

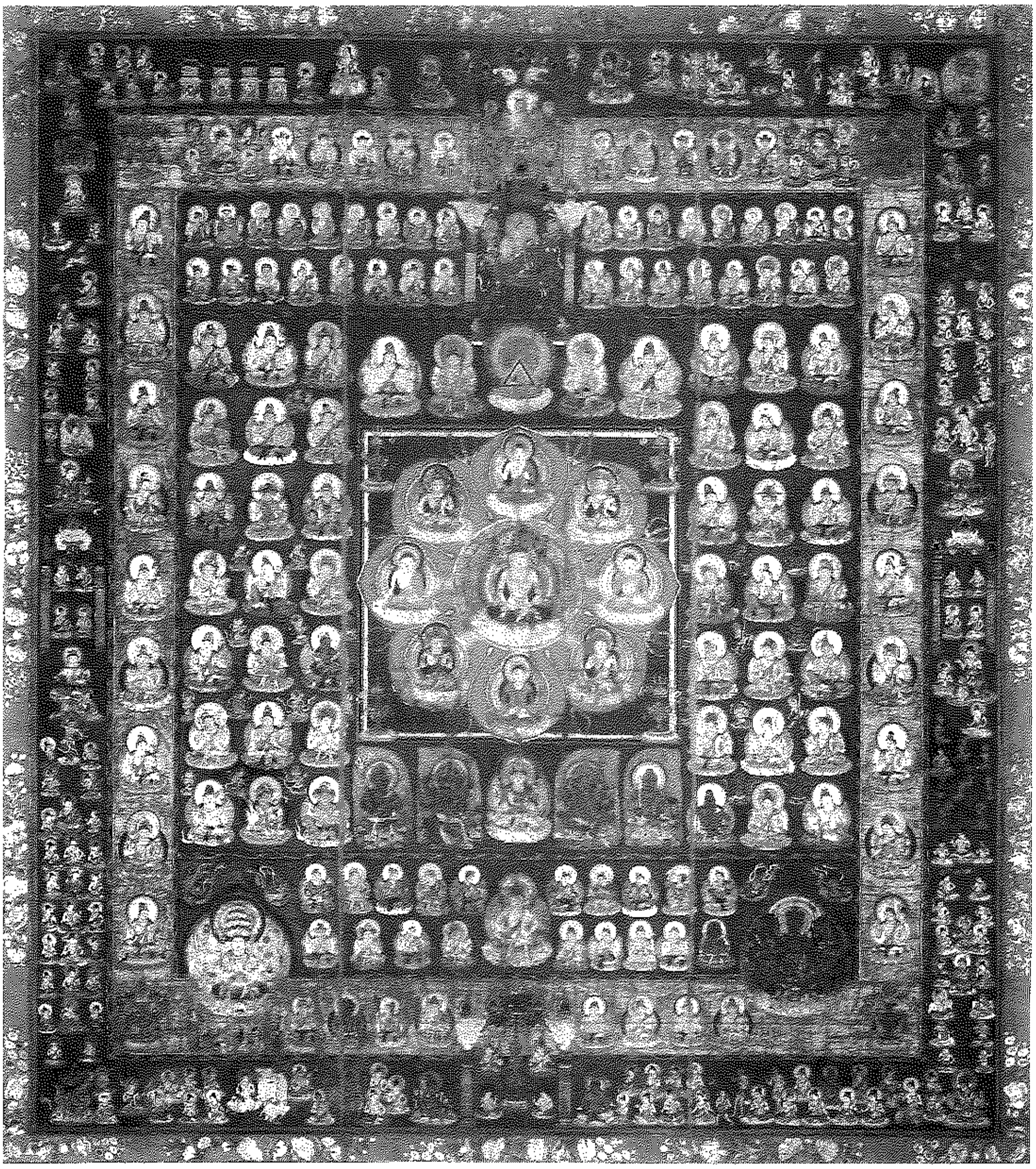


図１　胎蔵界曼荼羅（東寺伝）
http://blog.goo.ne.jp/yoshi_iltuki/e/e5881de0e90574b03369fd8125da0d7c

中央に主尊（大日如来）が配され、その周囲に様々な尊格が配置されている。

それら諸尊は、主尊である「大日如来が別の姿を取って顕れたもの、当体」であり、実は全ては大日如来に他ならない。

日蓮宗全国布教師連合会第40回代表者会議（総会）近畿教区大会研修講演資料
平成27年6月11日　於：ANAクラウンプラザホテル神戸

◇　曼荼羅は球体。上下、左右の区別なし。
◇　お題目は球の中心。形而上の真理そのもの。文字に非ず。
◇　その真理が球体の表面上に、形而下の存在として具象化される。
◇　大曼荼羅御本尊では、主尊がお題目「南無妙法蓮華経」であり、その他の諸尊が南無妙法蓮華経の当体。
◇　わたしたちも釈尊も、具象化された南無妙法蓮華経。
◇　大曼荼羅御本尊に向かい合う全存在は、具象化された南無妙法蓮華経。

『法華経』を信じご本尊に向かい合う者　＝　全員が具象化された南無妙法蓮華経

◇　ただし、目に見えるお題目や曼荼羅はあくまで形而下の存在。具象化された対象。それは真理そのものではない。このことを誤解すると、排他的な誤った法華信仰となる。

６．世界は統一されたか

・　正しい法華信仰を持つ者の視点からすれば、全世界は大曼荼羅御本尊に包摂される。
・　ただしそれだけでは、キリスト教やイスラム教の発想と本質的に違わない。
・　未信徒・異教徒をどうするか。「一天四海皆帰妙法。末法万年広宣流布」はどうする。“下種結縁”だけでいいのか。

まずは、阿説示（アシュヴァジット）に見習いたい

６－１．仏教世界の統一

『法華経』あるとき仏教あり。『法華経』なきとき仏教なし

『法華経』あるとき、南無阿弥陀仏も、坐禅も、南無大師遍照金剛もあり

６－２．全世界の調和に向けて

◇　大曼荼羅御本尊に表された当体は、諸仏菩薩はいうに及ばず、インドの論師たる龍樹、中国の天台大師、凡夫たる阿闍世王、畜生たる龍女、そして仏教以外の尊格である天照大神まで含んでいる。

◇　「三国伝来の仏教」といわれるように、当時の全世界は「天竺、中国、日本」の三国であったわけで、大曼荼羅御本尊には、全世界のありとあらゆる存在が網羅されていることになる。

日蓮宗全国布教師連合会第40回代表者会議（総会）近畿教区大会研修講演資料
平成27年6月11日　於：ANAクラウンプラザホテル神戸

◇　そして、それら全てが南無妙法蓮華経の当体。

◇　世界観が進展した今日、大曼荼羅御本尊には、今日の全世界も網羅されていると理解しなくてはならない。

◇　なぜならば、日蓮聖人は全世界を網羅しようとして大曼荼羅御本尊を開顕されたから。

・　曼荼羅は球体。
・　二次元の紙に表すと、大日如来やお題目は中央や最上部に描かれてしまうが、曼荼羅が球体である以上、実際には上も中央もなく、全ては平等であり等価値。

◇　衆生は、〈自分〉を造る〈サンスカーラ〉を制御することによって、菩薩にも仏陀にも成れる。その一方で、〈サンスカーラ〉を制御しなければ、三悪道に堕ちた〈自分〉をも造ってしまう。

仏教徒、キリスト教徒、ムスリムの違い

〈サンスカーラ〉の発動のされ方の違いに他ならない

◇　キリスト教：異教徒の存在を認めない。異教徒が地獄に堕ちるのを防ぐため、入信・改宗を薦め続ける。
◇　イスラム教：ムスリムを攻撃しないなら、異教徒と共存することを認める。無理に改宗を薦めない。〝異教徒は地獄に堕ちてもやむを得ない〟

仏教は宗教間の違いを乗り越える可能性を持っている

仏教　＝　法華経